はったつしょう

発達障がい

発達障がいは、先天的な脳機能の障がいです。幼少期の頃は本人も周囲も障がいに気づかず、大人になり社会生活を送っていく中で「生きづらさ」を感じはじめて診断を受けるという例も少なくありません。障がいの特性による困り感は人それぞれですが、大きく次の3つに分類されます。

※症状は単一または重複の場合もあります。

障がいの状態

自閉スペクトラム症（ASD）……コミュニケーションの困難さとともに、こだわりや興味の偏りなどがあります。本人自身「他の人と違う」と悩む方もいます。

注意欠如多動症（ADHD）……忘れ物が多いなどの「不注意」や、「衝動性」、動いてしまう「多動」を特徴とします。すぐに判断をしたり、衝動的に動いてしまい、後で落ち込んでしまう方もいます。

限局性学習症（SLD）……知的発達に遅れがなくても、読み書き、計算など特定の能力に困難があります。科目ごとに大きな開きがあるので、「怠けている」と誤解されることもあります。

▲目の不自由な方のための音声コード

配慮

こんなサポートがうれしい！

説明は短く、具体的に。様子の変化にも配慮をしましょう。

「初めてすること」や「変化への対応」が苦手な場合があります。説明するときは短い言葉や文章、絵や写真などで、順を追って具体的に示すと、理解しやすくなり失敗を少なくすることにつながります。また、不安な様子なときは静かな場所に案内するなどの配慮をしましょう。

本人が何を苦手と思っているか理解してください。

言葉を文字通りに受け取ってしまうために、冗談や比喩、曖昧な表現の理解が苦手な方や、時間管理が苦手な方、感覚が敏感な方などがいます。本人が何を苦手と思っているか、どのように接すれば本来の力を発揮できるかを理解し、適切な配慮をすることが大切です。

事例

例えば、こんなことがあります。

発達障がいのある方は、顔の表情などから相手の気持ちを推測して行動することが難しい場合があります。また、同時にたくさんのことを指示されると、適切な優先順位を付けられない場合があります。具体的な指示、取り組む順番や開始時間などをメモで渡すなどの配慮があると助かります。

周りの人の理解とサポートが大切です

発達障がいの特性

知的な遅れを伴うこともあります

自閉スペクトラム症（ASD）

- コミュニケーションの苦手さ
- 対人関係・社会性の問題
- パターン化した行動、興味関心のかたより
- 感覚の敏感さ、または鈍感さ
- 不器用さ

注意欠如多動症（ADHD）

- 不注意（集中できない、ぼーっとしている）
- 多動性および衝動性（じっとしていられない、考えるよりも先に動く）

限局性学習症（SLD）

- 「読む」「書く」「計算する」などの能力が、全体的な知的発達に比べて極端に苦手

※ASD・ADHD・SLDには、明確な境界線がありません。症状のあらわれ方は、年齢や状況により変化したり、重複することがあります。

※次のように言う場合もあります。
◎自閉スペクトラム症⇒自閉症、アスペルガー症候群を含む広汎性発達障がい（PDD）
◎注意欠如多動症⇒注意欠陥多動性障がい（ADHD）
◎限局性学習症⇒学習障がい（LD）

説明動画はこちら

※ご相談・お問い合わせ先は、障がい福祉関係団体一覧（P46）又は相談機関一覧（P48）をご覧ください。

▲目の不自由な方のための音声コード